

博士學位論文

内容の要旨及び審査結果の要旨

令和元年度

京都外国語大学

はしがき

これは学位規程（平成 25 年文部科学省令第 5 号）第 8 条による公表を目的として、令和 2 年 3 月 14 日に本学において博士の学位を授与した者の論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨を収録したものである。

氏名	趙 鍊徽
学位の種類	博士（言語文化学）
学位記番号	甲第21号
学位授与の日付	令和2年3月14日
学位授与の条件	本学学位規程第3条3号該当
学位論文題目	日本語条件表現の習得に関する研究—韓国人学習者の「中間言語体系」を中心に—
論文審査委員	主査 教授 由井紀久子 副査 教授 坂口昌子 副査 教授 前田直子（学習院大学）

論文内容の要旨

本博士学位請求論文は、韓国語が母語の日本語学習者による日本語条件表現の習得研究である。条件表現ト、バ、タラ、ナラは学習者にとって難しい項目の一つである。韓国語の条件表現は文法的制約がなく、多様な意味用法を表す・myeonという形態で表される。また、条件表現は初級段階で網羅的に教えらえるわけでもないこともあり、習得に困難を感じる項目である。これまでの条件表現に関する第二言語習得研究は、形態の正用誤用を中心とした習得に焦点が当たっていた。しかしこれでは習得のプロセスが見えず、韓国語を母語とした学習者がどのように言語知識を得て運用できるようになるか、どのような判断基準をもって条件表現を使うのかが明らかにならないと考え、習得プロセス全体を明らかにすべく、インプット、使用傾向や認識を中心に量的・質的にデータを収集、分析している。

第1章は序論で、中間言語の概念について概略を述べ、韓国人日本語学習者の中間言語体系はどのように構築されているか、また、それに影響を与える要因を明らかにするという研究目的を述べている。

第2章は、日本語条件表現に関する先行研究について述べている。本研究の枠組みを作る目的で、日本語学における条件表現ト、バ、タラ、ナラの基本的な用法と機能を概観し、形式ごとにまとめている。「と」形式は、前件と後件の事態の間に同時性と継起性を表し、条件と結果という因果関係よりは、ある条件が成立するとそれに対する結果が自然的・必然的に成立することを意味する。「ば」形式は、時間的観念をもたないため、「と」形式と比して、具体性に乏しく、観念的想像による場合が多い。また、客観的に条件と結果の因果関係

を示すため、前件と後件には話し手の恣意性の入り込む余地はほとんどない。「たら」形式は、「と」「ば」に比べて、条件と結果の二つの事態の関係が一般的、反復的なモノでなく、個別的、一回的な場合に用いられることが多い。「なら」形式を用いた文の特徴は、前件で、ある事態が真であると仮定し、それに基づいて後件で表現者の判断・態度を表明するという点にある。

第3章は、第二言語習得に関する先行研究の章である。基本的理論である対照分析、誤用分析、中間言語体系の3つの理論について概観している。また、第二言語習得に関わる要因と第二言語習得における条件表現の習得研究を概観し、検討したうえで、以下の問題点と課題を指摘している。

(Ⅰ) 従来の条件表現に関する習得研究では、量的調査や学習者の発話データを用いて母語が第二言語習得に与える影響、学習者の誤用、学習者の使用傾向、習得状況などの研究が殆どで、学習者からアウトプットされた結果を専ら研究者が分類した研究が多い。そのため、条件表現の使用に関して、学習者が条件表現の用法を意識しながら習得し、アウトプットしているのか、あるいは、他のことを意識してアウトプットしているのかなど、学習者の産出の基を明らかにすることはできなかった。つまり、学習者の習得上の問題点について、産出されたデータだけでは十分に説明できないのである。

(Ⅱ) さらに、学習者の習得上の問題点を明らかにするためには、なぜそのようなアウトプットを行うのか、または、学習者のアウトプットは何から作られているのかなど、学習者がそのようなアウトプットをするまでにどのようなインプットに触れているのかを探る必要もある。すなわち、学習者の条件表現の学習過程を探り、学習者の言語体系と形成要因も明らかにする必要がある。

上の問題点を踏まえ、学習者の条件表現の習得過程を明らかにするため、以下の研究課題を立てた。

課題① 韓国人学習者の条件表現の学習過程を明らかにする。

課題② 韓国人学習者における母語と日本語の対応関係を明確にする。

課題③ 条件表現における韓国人学習者の「中間言語体系」を明らかにする。

第4章は、課題①を教科書・教材分析の側面から明らかにする。高校、大学の修学能力の対策教材、大学の文法教材を調査の対象としている。高校の教科書では条件表現が断片的に扱われていること、一つの用法に偏ったり同じ文を繰り返し使ったりしていることが分かった。修学能力対策教材においては、多様な用法を扱っていること、文法的な説明とともに例文を挙げていることが明らかになった。大学の教科書はさらに多様な用法と例文が挙げられているものの、教科書によって文法説明に違いがあることが分かった。しかしながら、使用のしかたまでは記述が十分でなく、インテイクに至らない可能性も示唆された。

第5章は、韓国人学習者における仮定性有無による条件表現使用傾向と、条件表現を用いる際の母語と日本語との関連性、また、条件表現の学習と使用に関する認識を明らかにすることを目的とし、266名を対象に行ったアンケート調査の結果と分析を提示している。仮

定的用法においては、「たら」形式を用いる傾向があること、「と」形式の文末制約に関しては上級者でも習得されにくいことが分かった。非仮定的用法に対しては、「と」と「たら」を用いる傾向があること、特に一般条件の用法においては教科書や教材からのインプットの偏りがあり、「と」形式と完全に結びついていることが観察された。韓国語解釈の結果としては、-myeon と対応しない「連続」と「きっかけ」を表す条件文に対して、初級と中級では対応させていて、日本語の条件表現「と・ば・たら・なら」に韓国語の-myeon を対応させるという知識構築が見られた。この知識もレベルが上がるとむしろ習得の妨げになるという認識も得られている。条件表現の使用においても、どの形式を用いればいいかについて明示的知識を活用しているというより直感的に用いている学習者が多かった。条件表現を用いる際の母語への依存に関しては、日本語専攻の学習者と滞在経験がある学習者、上級の学習者は母語に頼らずに用いるが、そうでない場合とで差異が見られた。

第 6 章はアンケート調査の対象者のうち 28 名に対して行った、韓国人学習者による条件表現使用時における学習者のルールと条件表現のしようと学習に関する認識についてのインタビュー調査の結果を質的に分析したものである。「と」形式では、事実的や科学的、自然的、法則的、反復的な現象に用いるという言語知識が明示的知識として構築されており、自動的にアプトプットされる傾向であった。初級学習者からは、動詞活用の難しさから、動詞の基本形と共起させるという「と」の使用傾向が見られた。「ば」形式については、仮定する場面や後件が成立するための前提を前件に述べる際に用いるという言語知識を基に用いていた。「たら」形式は、文体による違いの他、過去形の文には「た」という学習者特有のルールが見られた。「なら」については、「名詞+なら」という形式的な面と後悔する表現や主観的な表現には「なら」という意味的な面が観察された。さらに、条件表現の意味に関わらず、「と・ば・たら・なら」形式と共起する動詞や形容詞、副詞などによって条件表現を使い分けている学習者なりのルールもあることが分かった。また、これらのルールに学習者自身気づいていない人も見られた。インプットが十分に理解できない用法であった場合、学習者なりのルールが形成されていることが分かった。

第 7 章は総合的考察と今後の課題について述べている。韓国人学習者は多方面から触れている条件表現のインプットから韓国人学習者の中間言語体系が形成され、このような中間言語体系を基に条件表現を用いている。この中間言語は条件表現の複雑な文法項目を含めて、母語に影響されつつ、教室や教科書・教材または媒体などのインプットから影響を受けて形成されているのである。本研究で得られた結論を実際の使用された日本語を観察することによって検証することは今後の課題である。また、韓国人以外の学習者の中間言語と比較することによって韓国人学習者にとって特有なのかを追究することも残された課題である。

口述試問及び審査結果

申請者による論文の概要のプレゼンテーションの後、審査員からの質問・コメントに応じた。第二言語習得研究分野の専門用語の定義の確認、特に「習得」概念がどのような時点で習得されたと見做すのかについて、また、「直感」という日常言語を第二言語習得論ではどのように説明できるのかについて、現代におけるインプットの多様化と接触頻度について等の質問があった。これらの質問に対しては、よどみなく自分の考えを述べていたが、一部専門用語との関連付けが弱いところもあった。論文の構成と一貫性について、5章と6、7章との内容や用語等のつながりの悪さについて指摘があった。編集して表の位置を変えるなどの工夫が必要であることが認識できた。表の数字と記述部分の数字に齟齬が見られる箇所の指摘や、不自然な日本語についても確認があった。これらについても、理解し、修正によって改善することが確認された。

これまでの第二言語習得研究では、「間違えずに使えるようになったか」を習得の基本として、穴埋め問題や作文データ等の産出サンプルを分析することが多かった。本研究では、様々な要因を含む学習プロセス全体を調査することによって、韓国語を母語とする日本語学習者のルール、中間言語体系を明らかにすることを特徴としている。全体的に、よく整理され、研究課題も明確でそれを解明するためのデータが多角的に収集され、論旨が明確で分かりやすいと評価できる。4章のデータは、単独の学術論文になりにくいが必要とされるデータであり、資料的価値が高い。韓国語が母語の研究者ならではのデータ収集にも成功している。量的データの扱いも適切であった。質的データの分析については、一部、口述試問結果にある通り、弱いところも見られたが、本論文の価値を大いに損ねるレベルではなかった。

審査員からの質問に対しても自らの考えをしっかりと述べることができていた。研究者としての基礎能力があることが確認できた。日本語能力も高く、英語文献も扱っており、必要な外国語能力も確認できた。

以上の審査結果から、本博士学位申請論文は合格水準以上であり、博士（言語文化学）の学位を授与するに値するものと認める。